

原の辻遺跡調査事務所調査報告書 第23集

はる つじ
原 の 辻 遺 跡

幡鉢川流域総合整備計画（圃場整備事業）
に伴う緊急発掘調査報告書 X

2001

長崎県教育委員会

原の辻遺跡調査事務所調査報告書 第23集

はる つじ
原 の 辻 遺 跡

幡鉾川流域総合整備計画(圃場整備事業)
に伴う緊急発掘調査報告書 X



21~23区 航空写真 右から1号溝, 2号溝, 3号溗



24~26区 航空写真



調査区全景 航空写真（右方が北側）

発刊にあたって

本書は、幡ヶ浦川流域総合整備計画の県営圃場整備事業に伴って、平成12年度に実施した原の辻遺跡の緊急発掘調査報告書です。

発掘調査の結果、弥生時代の溝6条・水田跡2枚とその間に矢板を打ち込んだ畦畔を検出しました。溝の内3条は濠になる可能性もあります。出土遺物は、弥生時代の土器、石器、木製品、朝鮮半島系の無文土器、古墳時代の土師器等があります。今回の水田跡の検出は、調査区の南端が丘陵から沖積地の低地への地形変換点に位置することが、その造営条件に合致しているものと考えられます。

原の辻遺跡は、『魏志倭人伝』に現れる国々のなかで、中心集落が特定できる唯一の遺跡です。このことから、重要遺跡として認められ、平成12年11月24日に国の特別史跡指定を受けました。現在、遺跡保存整備委員会において、その保存と活用を図る検討がなされていますが、地域の方々のご理解とご協力をいただきながら、調整を図っていくことも大切であると考えます。さらに、島内には、原の辻遺跡のほかにもカラカミ遺跡・車出遺跡・双六古墳・篠塚古墳といった多くの文化財があります。これらは、永く培われてきた貴重な文化遺産であり、この遺産を後世に引き継ぐことが私たちの責務と考えます。

本書が、学術研究及び文化財保護の面で活用されることを念願して刊行のあいさつをいたします。

平成13年3月31日

長崎県教育委員会教育長 木村道大

例　　言

1. 本書は、幡鉢川流域総合整備計画に係る県営圃場整備事業の農道建設工事に伴って実施した、平成12年度の石田町池田仲触鏡ノ池所在の原の辻遺跡の緊急発掘調査報告書である。

2. 本書の執筆は、2(2)を藤村誠、1と2(1),(3)と3を村川逸朗が、それぞれ分担して行った。

3. 本調査は、440m²を農林水費用負担として県教育委員会が平成12年10月10日～平成12年12月26日まで行い、78m²を石田町（池田仲触鏡ノ池）教育委員会が国庫補助を受けて平成12年10月16日～平成12年11月13日までの日程で実施した。

4. 調査組織

県関係

調査主体	県教育庁原の辻遺跡調査事務所	所長	田川　　築
	タ	課長	安楽　　勉
		総務課長（兼）	町田　一久
	タ	係長（兼）	長岡　正配
調査担当	県教育庁原の辻遺跡調査事務所	主任文化財保護主事	村川　逸朗
	タ	文化財保護主事	藤村　誠

町関係

調査主体	石田町教育委員会	教育長	山口　　税
調査担当	タ	文化財担当	河合　雄吉

5. 本書には、県教育委員会が主体になった部分と石田町教育委員会が主体となった部分を併せて掲載した。

6. 本書に関する出土遺物と図版及び写真類は、原の辻遺跡調査事務所及び石田町教育委員会に保管している。遺物は、原の辻遺跡調査事務所及び老舗・原の辻展示館において展示保管する。

7. 本書の編集は、村川・藤村が行なった。

8. 本書では、磁北を方位として使用した。

本文目次

1 地理的・歴史的環境	1
(1) 地理的環境	1
(2) 歴史的環境	1
2 調査	3
(1) 調査概要	3
(2) 土層	6
(3) 遺構	6
(4) 出土遺物	16
3 まとめ	24

挿図目次

第1図 遺跡の位置 (1/240,000)	2
第2図 原の辻遺跡位置図 (1/25,000)	4
第3図 調査区配置図 (1/2,000)	5
第4図 遺構配置図 (1/200)	8
第5図 0号溝実測図・東壁土層図 (1/60)	9
第6図 3号溝実測図・東壁土層図 (1/60)	10
第7図 1号溝・2号溝実測図・土層図 (1/60)	11
第8図 水田跡・畦畔跡実測図・土層図 (1/80)	13
第9図 畦畔跡矢板列実測図 (1/30)	15
第10図 出土遺物① 土器・陶磁器 (1/4)	17
第11図 出土遺物② 土器 (1/4)	18
第12図 出土遺物③ 土器他 (1/4)	19
第13図 出土遺物④ 石器 (1/4)	20
第14図 出土遺物⑤ 木製品 (1/6)	22
第15図 出土遺物⑥ 木製品 (1/6)	23
第16図 訪問交易と土器の動き	24
第17図 これまでの調査成果による遺構配図	25

図版目次

- 図版1 調査区全景（南から）・調査区全景（北から）
- 図版2 調査風景・調査風景・調査風景（石田町調査区）
- 図版3 1号・2号・3号溝検出状況・2号溝遺物出土状況・2号溝検出状況・水田・畦畔検出状況
- 図版4 0号溝検出状況・1号溝検出状況・2号溝検出状況・3号溝検出状況
- 図版5 中世の杭列検出状況・25区西壁上層と矢板出土状況・24区水田検出状況
- 図版6 1号溝・2号溝出土状況・1号溝遺物出土状況・水田・畦畔検出状況・4号溝検出状況
- 図版7 2号溝遺物出土状況・2号溝内杭列検出状況・6号溝と畦畔跡・矢板列検出状況
- 図版8 矢板出土状況・矢板出土状況・矢板出土状況（石田町調査区）

1. 地理的・歴史的環境

(1) 地理的環境

壱岐は、九州本土と朝鮮半島の間に位置している。壱岐・対馬間約48km、壱岐・松浦半島間約20km、壱岐・福岡県糸島半島間約33kmと、古来より大陸文化の中継地点として重要な役割を果たしてきた。一方、防人の設置や、刀伊の米襲や元寇によって被害を受けるなど、外敵の襲来や防備にも心を配ってきた地でもある。壱岐島は、東西約15km、南北約17km、面積約138km²の本島と26余りの付属島から成り立っている。行政的には現在4町に分かれており、人口3万5千人を数える。島の基盤は第3紀層、全体的になだらかな玄武岩台地であり、最高峰の岳の辻でも213mにすぎない。島の南東部には「深江田原」(約200ha)と呼ばれる平野があり、長崎県下では最大の沖積地として、また、後世の干拓による県央部の諫早平野を除けば、県下最大の穀倉地帯として有名である。この深江田原をなかを東に向かって流れ、内海に注いでいるのが、延長9kmの幡鉢川である。また、幡鉢川の支流の池田川が、深江田原を南から北へ流れている。遺跡は、幡鉢川の南側一帯に広がっているが、今回の調査地点は、幡鉢川の南側、台地部(南から川に直交する形で突出した南北1000m、東西250m、標高約18m前後の舌状台地、台地中央部が高く、北端部との差は約3.0m)の西側にあたる、農道部分である。

(2) 歴史的環境

壱岐は、歴史的には、「一支国」として3世紀の歴史書『魏志倭人伝』に登場してくる。その当時の一支国は「官をまた草狗といい、副官を卒奴母離という。竹林・叢林が多く、三千ばかりの家がある。やや田地があり、田を耕してもなお食べるには足らず、また、南北に行き米を買うなどする。」状況であり、人々が活発な交易活動を行っていたことを物語っている。原の辻遺跡は、大正時代から紹介されており、以来、東亜考古学会・九学会・長崎県教育委員会などにより、調査が行われてきた。

調査により、台地部を取り巻く多重環濠・弥生時代の道路状遺構・石敷遺構・祭祀建物・船着き場跡・水田の畦・石積墓・甕棺墓などが検出した。また、舶載鏡・貨泉・五銖錢・三翼鐵・朝鮮半島系土器などが出土しており、原の辻遺跡が、弥生時代の一支国都として栄えたことを物語っている。古墳時代にはいると、数多くの古墳が残っているが、壱岐最古の古墳と考えられているのは、5世紀に築かれた大塚山古墳である。そして、6世紀から7世紀になると、古墳は集中的に造られるようになるが、なかでも、県内最大規模(全長約91m)の前方後円墳である双六古墳、同じく県内最大規模(直径約45m)の円墳である鬼の窟古墳、金銅製馬具が出土した直径約38mの葦塚古墳などが有名である。

8世紀、律令体制の下では、壱岐は、西海道のなかの・国としての地位を与えられた。『養老令』には、「壱岐・対馬・日向・薩摩・大隅等の國は、急じて鎮木早、防守、及び海客の帰化を知る」と規定されており、「島司」の派遣と防人の配置がなされて、その任にあたっている。また、壱岐は、下国として扱われている。さらに、『延喜式』によれば、壱岐島には、優通・伊周の二駅があり、それぞれ五疋ずつの駆馬をおいている。両駅は、それぞれ壱岐島の北端と南端に位置しており、その最短距離のルートについて、津の宮から池田・興原に至る現在の道が想定されている。平成7年には、

幅約6.0mの8世紀には焼絶したと思える道路状遺構が、原の辻遺跡川原畠地区の調査において検出されている。島には、壇岐島府が設置されていたが、所在地については、印鑑社とも呼ばれる式内社の興神社がある芦辺町興触が、島府所在地である可能性もあると考えられている。一方、原の辻遺跡から、木筒が出土しており、遺跡南端部から、9世紀を中心とした初期貿易陶磁器片も出土している。

[参考文献]

1. 「原の辻遺跡」長崎県文化財報告書第26集 長崎県教育委員会 1976
2. 「壇岐山島分寺」芦辺町文化財報告書第7集 長崎県芦辺町教育委員会 1993
3. 「壇岐山島分寺」芦辺町文化財報告書第8集 長崎県芦辺町教育委員会 1994
4. 「原の辻遺跡」芦辺町文化財報告書第9集 長崎県芦辺町教育委員会 1995
5. 「椿遺跡」石田町文化財報告書第1集 長崎県石田町教育委員会 1996
6. 木本雅康「律令国家とその社会」『原始・古代の長崎県 通史編』長崎県教育委員会1998
7. 横山 順「壇岐の古代と考古学」「海と列島文化」第3巻玄界灘の島々 小学館1990



第1図 遺跡の位置 (1/240,000)

2. 調査

(1) 調査概要

今回の調査は、県営轟鉢川流域総合整備計画区域内の農道建設に先立って行われた緊急発掘調査であり、関係各機関との協議を行って、農道造成区域の520m²について調査を行った。そのうち原の辻遺跡調査事務所が440m²、石田町教育委員会が80m²を担当した。調査対象地区は、原の辻遺跡調査事務所の敷地南東隅から南に向かって一直線にのびる。調査区の延長は117mで、前年度及び前々年度分とあわせると総延長522mになり、丘陵部の西側低地部を、ほぼ端から端まで貫く形となっている。なお、並行して県道が造成されることになっており、農道地区の調査と同時に117m(1m×117m)の調査を行った。遺構図には、農道部分、県道部分を併せて掲載しているが、県道部分の報告については、別途報告を行う。

① 土層と遺物の出土状況

今年度の調査の土層は、1層が客土層である。2層が暗灰褐色土層（中世期）、3層が黒褐色土層（弥生時代中期～古墳時代前期）、4層が灰青色粘質土層（この層を掘り込んで弥生時代中期から古墳時代前期の1～3号溝等の遺構等がある）、5層が混疊黄橙色粘質土層で地山の無遺物層となる。遺物の出土状況は弥生時代中期から古墳時代前期のものが中心である。

② 各調査区の概要

- ・21区の調査区北端で弥生時代中期から後期の0号溝を検出した。最大幅2.20m、深さ0.8mである。南南東から北北西の向きに走っている。溝の上部から弥生時代中期後半の朝鮮半島系無文土器小形甕が出土した。
- ・22区で1号溝を検出した。最大幅3.28m、弥生時代中期～後期時期の溝で、溝内より弥生時代中期後半の朝鮮半島系無文土器壺が出土した。
- ・22区から23区にかけて2号溝を検出した。最大幅1.68m、出土する遺物は弥生時代中期から後期で、古墳時代前期の土師器も認められるところから、この時期にその機能を終えたものと考えられる。溝の底部に間隔はまばらであるが、杭列が並んでいる。溝内より弥生時代中期後半の無文土器が出土した。
- ・23区で3号溝を検出した。最大幅2.44m、出土する遺物は弥生時代中期から後期の土器である。以上の1～3号溝は、時期もほぼ同一時期で、その方向も北西から南東とは同じ向きを示している。現時点では溝としているが、それそれが濠になる可能性もある。
- ・24区から25区にかけて東壁の壁際に4号溝が確認された。幅、所属時期等は未掘であるため不明である。3号溝の延長である可能性もある。
- ・25区で矢板を打ち込んだ畦畔跡とその両側におそらく水田跡と思われるもの2枚を検出した。所属時期は弥生時代中期から古墳時代前期のものであろう。この畦畔跡と水田跡と推定される2枚は6号溝に切られている。
- ・25区から26区にかけて北北西から南南東にかけての向きで6号溝を確認した。



第2図 原の辻遺跡位置図(1/25,000)網点部分



第3図 調査区配置図 (1/2,000)

(2) 土層

1層は客土である。2層が暗灰褐色土、3層は黒褐色土で中世の中國產の青磁が出土した。4層は灰青色粘質土で、この層を掘り込んで弥生時代中期から古墳時代前期の溝がある。5層は混疊黃褐色粘質土で埴山の無遺物層と考えられる。溝の覆土は上面が黒褐色又は黒色粘質土で、弥生時代後期から古墳時代前期の土器を中心に出土した。下面はオリーブ色土で数は少ないものの弥生時代中期の土器が出土した。25区～26区にかけて検出した水田層は西壁の5層、東壁の6層がこれにあたる。

(3) 遺構

①溝

21区で0号溝を検出した。南南東から北北西方向に延びており、最大幅約2m20cm、深さ約80cmを測り、約12mを確認した。調査区北端は旧農道の橋げたがコンクリートで固められていたため未掘であるが、昨年の調査区で検出された4号印河道につながる溝である可能性もある。遺物はほとんどないが、溝の上部から弥生時代中期後半の朝鮮半島系無文土器小型壺が出土した。

22区で1号溝を検出した。北西から南東方向へ延びる。最大幅約3m30cm、長さ約6m50cmを検出した。覆土は1層が黒色粘質土、2層が褐灰色砂質土、灰黄櫻色砂質土で、褐灰色砂質土の下さらに一段深く掘り下げられていた。遺物が少ないため掘り込まれた時期については明確でない。浅い方の溝の深さ約35cm、深い方の溝の幅約1m50cm・深さ約80cmを測る。溝内の2層から弥生時代中期後半の朝鮮半島系無文土器壺・三瓣系瓦質土器片が出土した。

22区から23区にかけて2号溝を検出した。北西から南東へ延びる。最大幅約1m70cm。溝の中央部がやや浅くなり、両側に広がるとともに深くなっている。中央部の深さ約30cm、北西側の溝の深さ約70cm、南東側の溝の深さが約1mを測り、長さ約8mを確認した。南東側の溝の最低部から弥生時代中期の土器の底部が出土した。溝中位の層からは弥生時代後期の壺・壺・鉢が、溝上面の黒褐色系の覆土で古墳時代前期の土師器が認められることから、中期に掘られ古墳時代前期に溝としての機能を終えたものと考えられる。また、間隔は一定ではないが、溝の中から11本の杭列も確認された。杭は青灰色土層に打ち込まれており、溝の崩れを防ぐ目的で打ち込まれた可能性もある。北西側の溝の黒褐色粘質土層から朝鮮半島系無文土器底部が出土した。

23区で3号溝を検出した。北西から南東方向へ延び、調査区東壁際でやや南に曲がっていく。最大幅2m40cm、深さは約1m20cmを測り、約5m30cmを確認した。遺物の包含層は溝上面の黒褐色・黒色土で、弥生時代中期から後期の土器が出土している。溝の北西部調査区西壁際は近代の土木工事により掘削を受けている。

24区から25区の調査区東壁際で南北に延びる4号溝を検出した。溝の西側岸部分を幅約20cm程度掘っただけなので溝の幅・所属時期等は不明であるが、23区で検出された3号溝の延長である可能性も

ある。

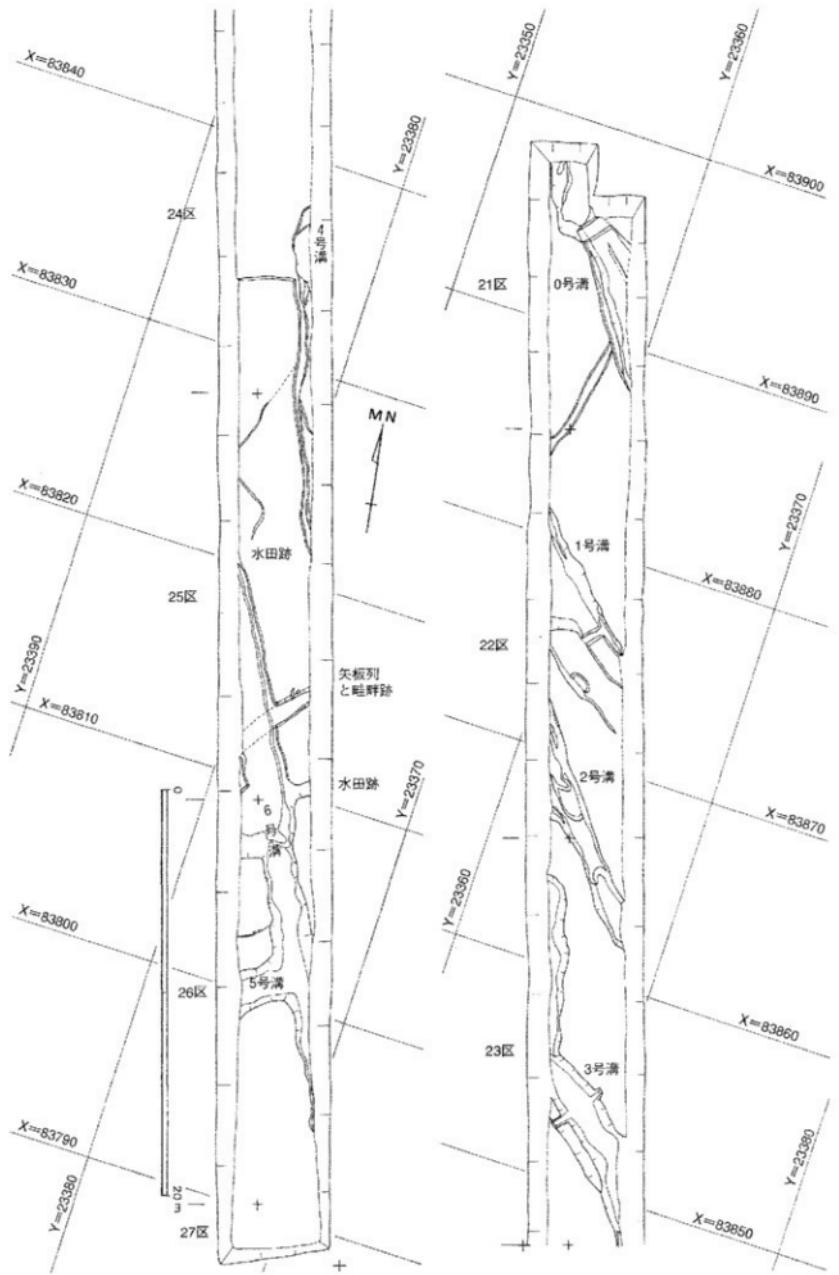
26区の石田町調査区域で5号溝を検出した。東西方向に最大幅約1m90cm、深さ約20cmを測り、長さは約2m20cmである。6号溝によって切られていた。

25区から26区にかけて6号溝を検出した。北北西から南南東に延び、5号溝・水田跡・畦畔跡遺構を切っていた。最大幅約1m90cm、深さ約80cmを測り、約18mを確認した。溝の中から遺物はほとんど出土していない。

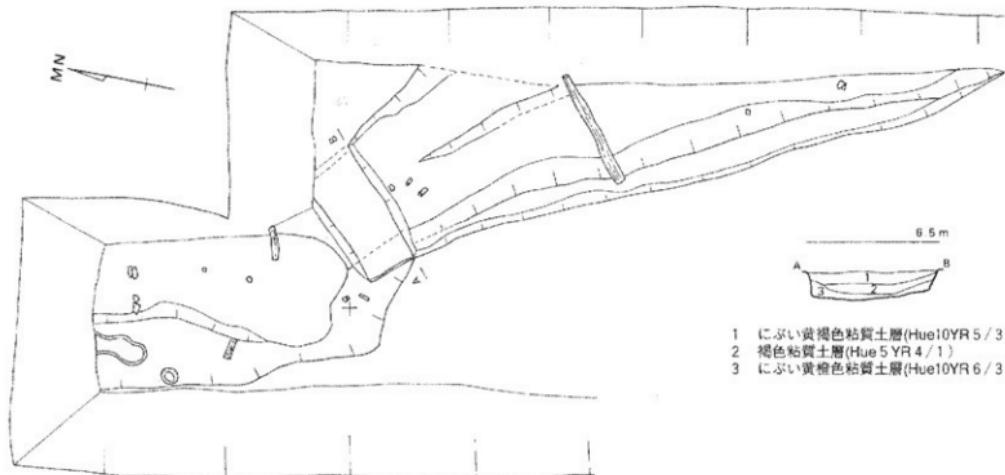
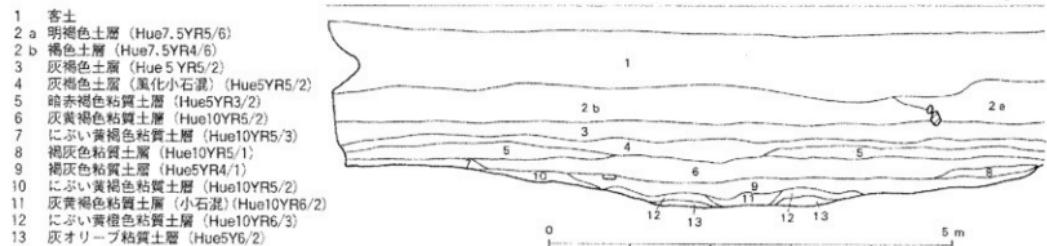
②水田畦畔跡

25区で調査区東壁際と西壁際で矢板を打ち込んだ畦畔跡とその両側におそらく水田と思われる2枚を検出した。畦畔は北東から南西方向に延び、幅約70cm、長さ約4m50cmを検出した。所轄時期は弥生時代中期から古墳時代前期のものであろう。この畦畔跡と水田跡と推定される2枚は6号溝に切られている。26区の石田町調査区域の5号溝北側でもこれとほぼ同じ向きで矢板列を検出した。

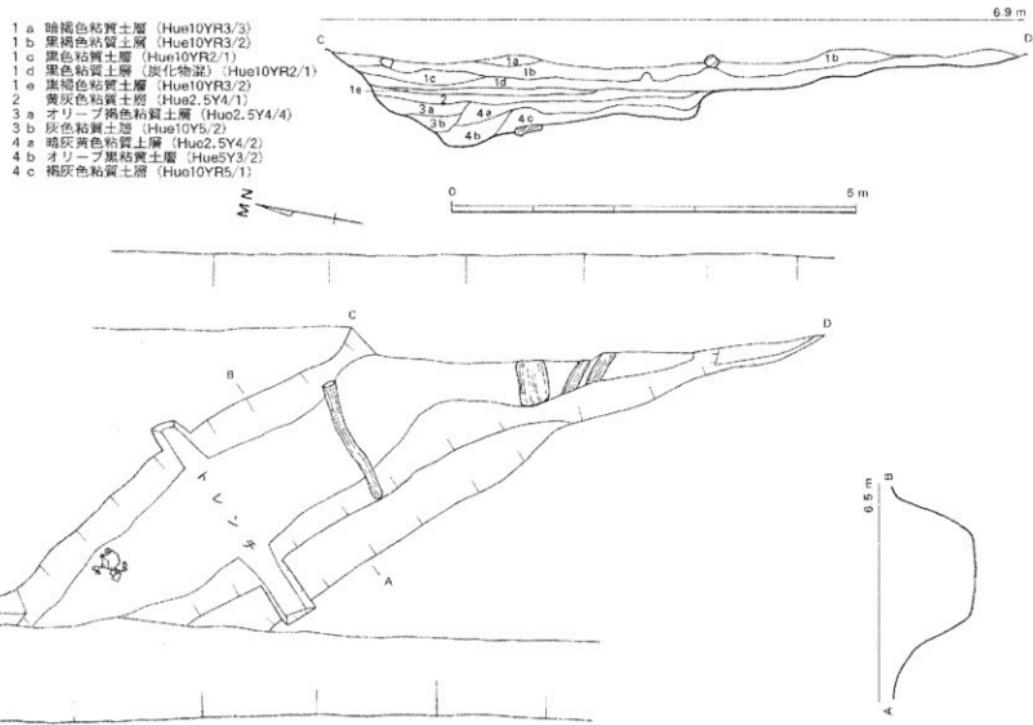
今回の調査区南端からは湧水があり、相当量の水が湧き出ている。今回の調査ではその湧水に大いに苦しめられることになったが、この湧水と丘陵から沖積地への地形変換点に位置するという条件が、水田造営と無縁ではないと思われる。遺跡の中央に位置する台地上の西側低地部は試掘調査は行われているものの面的な調査はまだ不十分である。今回の調査区は幅約5.3mと限られた範囲であったが、今後のこの地域の調査で遺跡南西部の状況が明らかになることに期待したい。



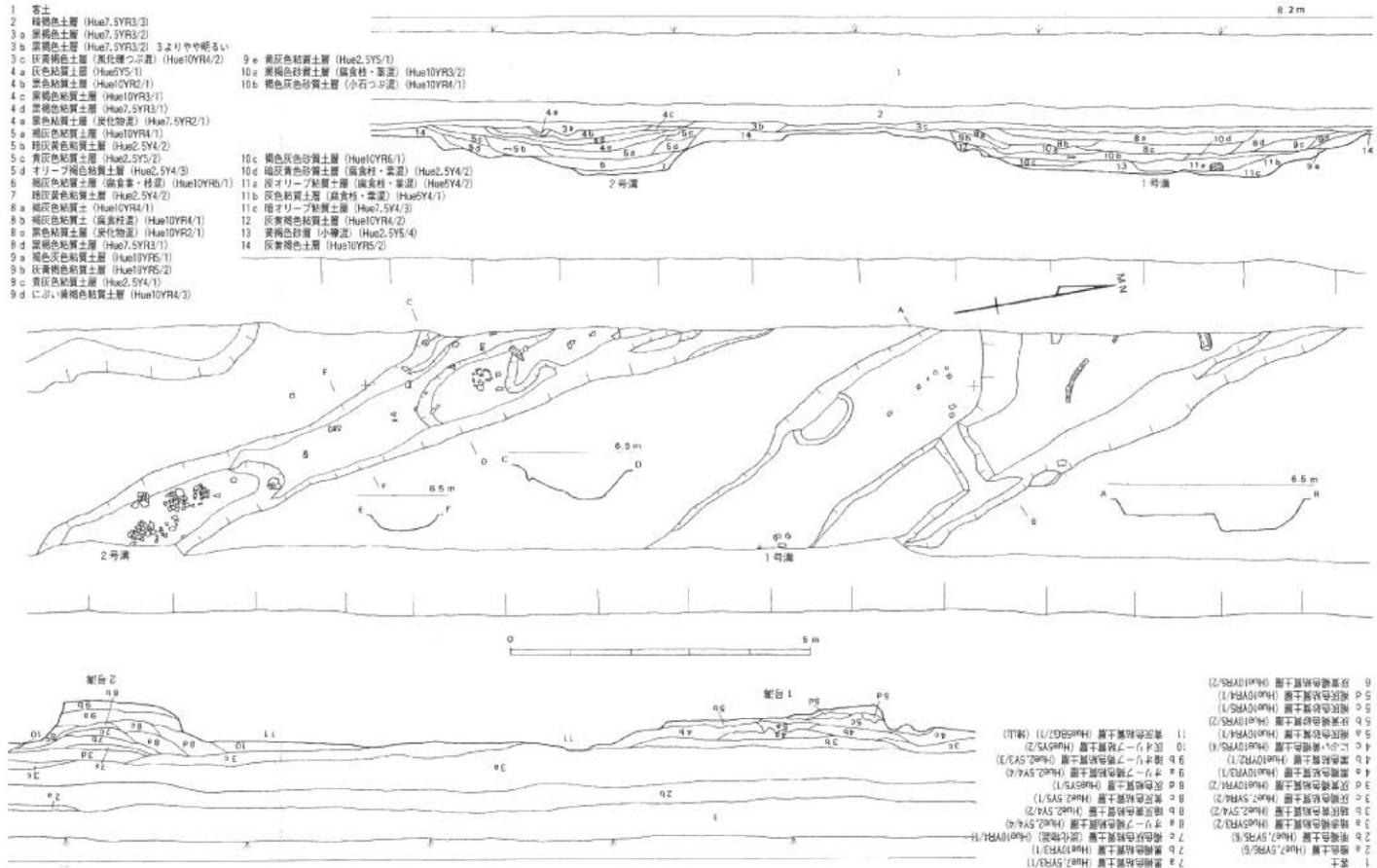
第4図 遺構配置図 (1/200)



第5図 0号溝実測図・東壁土層図 (1/60)

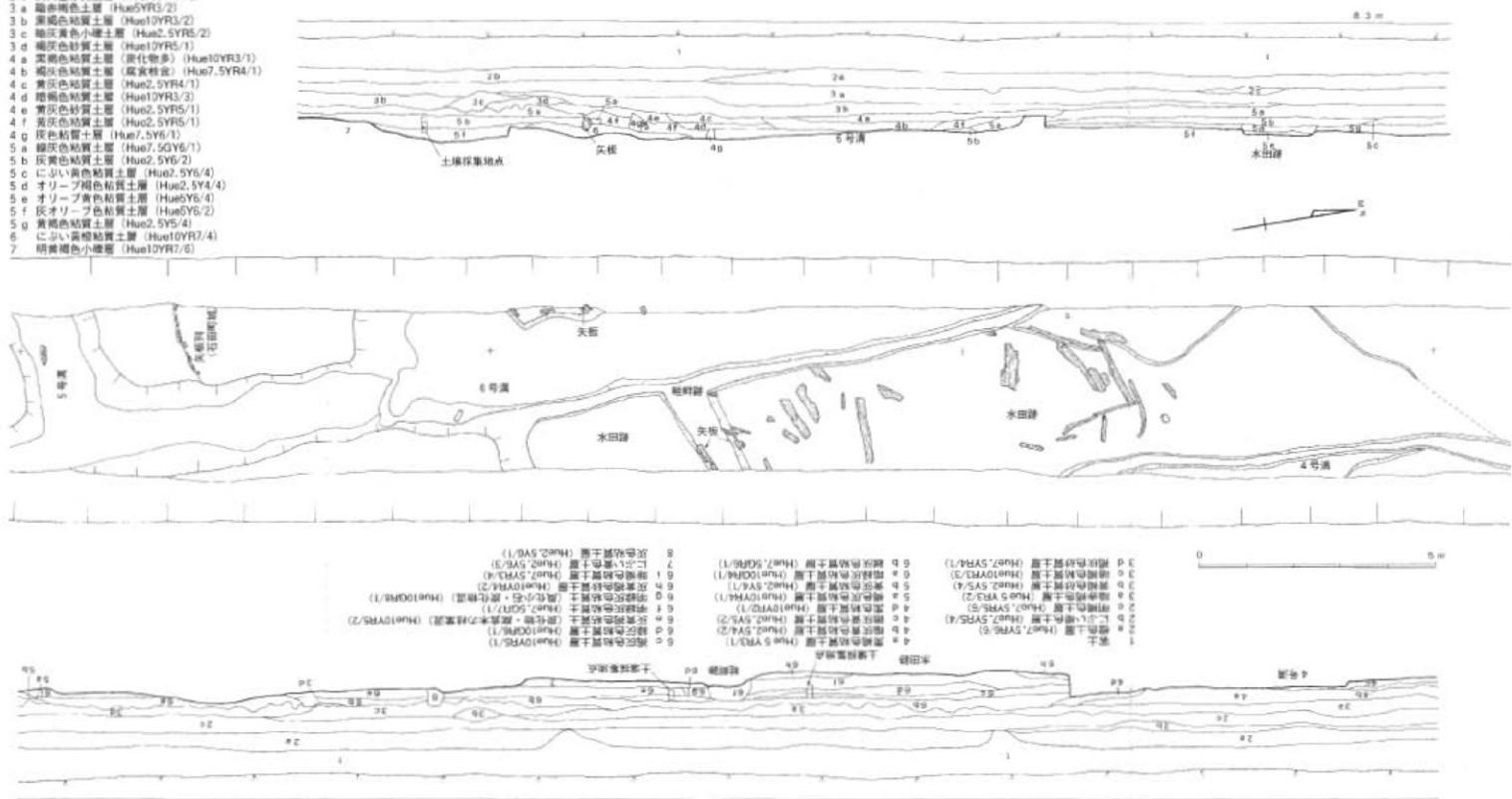


第6図 3号溝実測図・東壁土層図 (1/60)

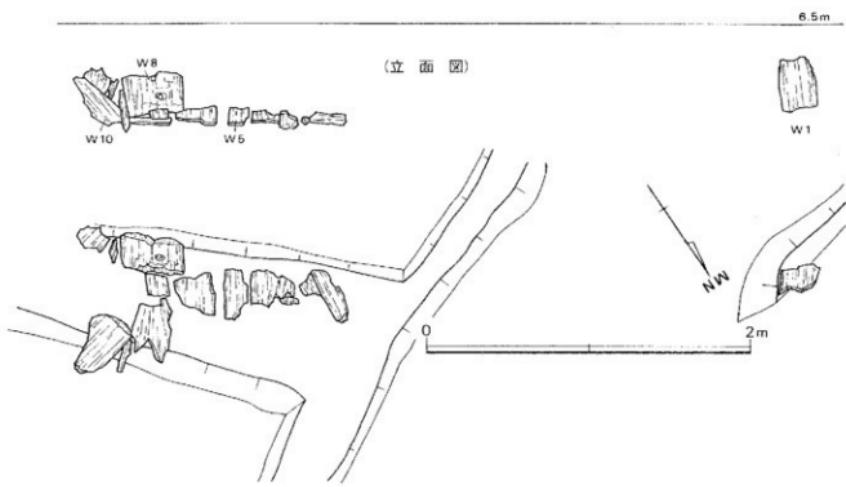


第7図 1号溝・2号溝実測図・土層図 (1/60)

- 富士
 1 a) いよい黄褐色土層 (Hue10YR4/3)
 2 b) 床黄褐色土層 (Hue10YR4/2)
 3 c) 黄褐色妙土層 (Hue7, SYR4/2)
 3 d) 鮎褐色妙土層 (Hue5YR2/2)
 3 e) 楠褐色妙土層 (Hue10YR3/2)
 3 f) 鮎褐色妙土層 (Hue10, SYR2/2)
 3 g) 黄褐色妙土層 (Hue10, SYR2/1)
 3 h) 黄褐色妙土層 (Hue10YR3/1)
 4 a) 鮎褐色妙土層 (Hue7, SYR4/1)
 4 b) 黄褐色妙土層 (Hue2, SYR4/1)
 4 d) 鮎褐色妙土層 (Hue10YR3/3)
 4 e) 黄褐色妙土層 (Hue2, SYR5/1)
 4 f) 黄褐色妙土層 (Hue2, SYR5/1)
 4 g) 黄褐色黏土層 (Hue7, SYL6/1)
 5 b) 鮎褐色妙土層 (Hue7, SGYB/1)
 5 c) 黄褐色妙土層 (Hue2, SYG/2)
 5 d) にじいろ色粘質土層 (Hue7, SYG/4)
 5 e) 鮎褐色粘質土層 (Hue7, SYG/4)
 5 f) オリーブ色粘質土層 (Hue7, SYG/4)
 5 g) 黄褐色粘質土層 (Hue2, SYG/2)
 5 h) 黄褐色粘質土層 (Hue2, SYG/4)
 6 a) いよい黄褐色土質 (Hue10YR7/4)
 6 b) 明黄色妙土質 (Hue10YR7/6)



第8回 水田耕・畔畔跡変測量・土層圖(1/80)



第9図 畦畔跡矢板列実測図 (1/30)

(4) 出土遺物

今回の調査の出土遺物は、弥生時代中期から古墳時代前期の土器やすり石・石礫・石斧・砥石・台石や、木出畦畔の矢板等である。土器の大半は0～3号溝内出土の遺物であるが、最初にそれ以外の遺物の説明から行いたい。

①土器・陶磁器

1は、唯一の中世期・鎌倉時代の中国製輸入陶磁器青磁の底部である。今回の調査で弥生時代中期～古墳時代前期の層の上層からの打込みの枕列があり、それに付随するものかと推測される。6号溝の上位から出土したことから、6号溝はこの時期に属する可能性がある。

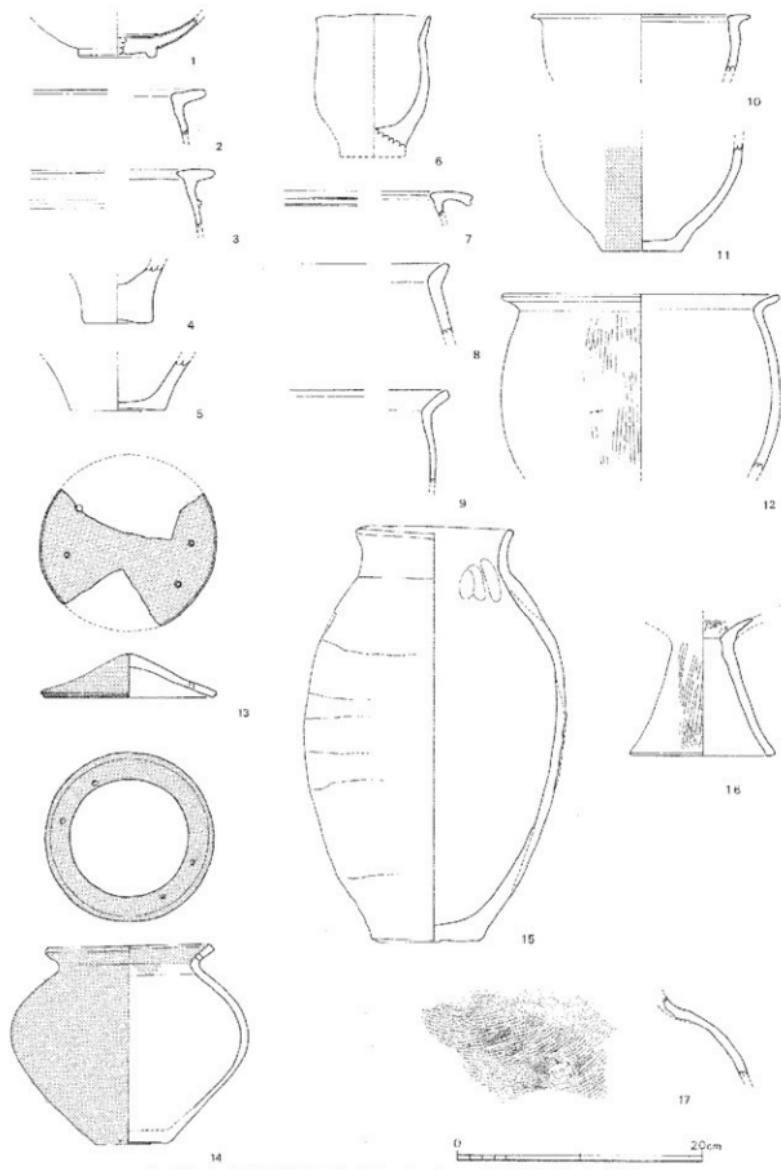
2と3は、いずれも鋤形口縁をもち内側に傾くか水平のもので須久I式新段階のものである。2は21区、3は22区双方とも3層からの出土である。4と5は底部で、分厚いものと薄いものの両方がある。4は須久I式古段階のものか。それぞれ21・22区3層の出土である。

0号溝出土の遺物

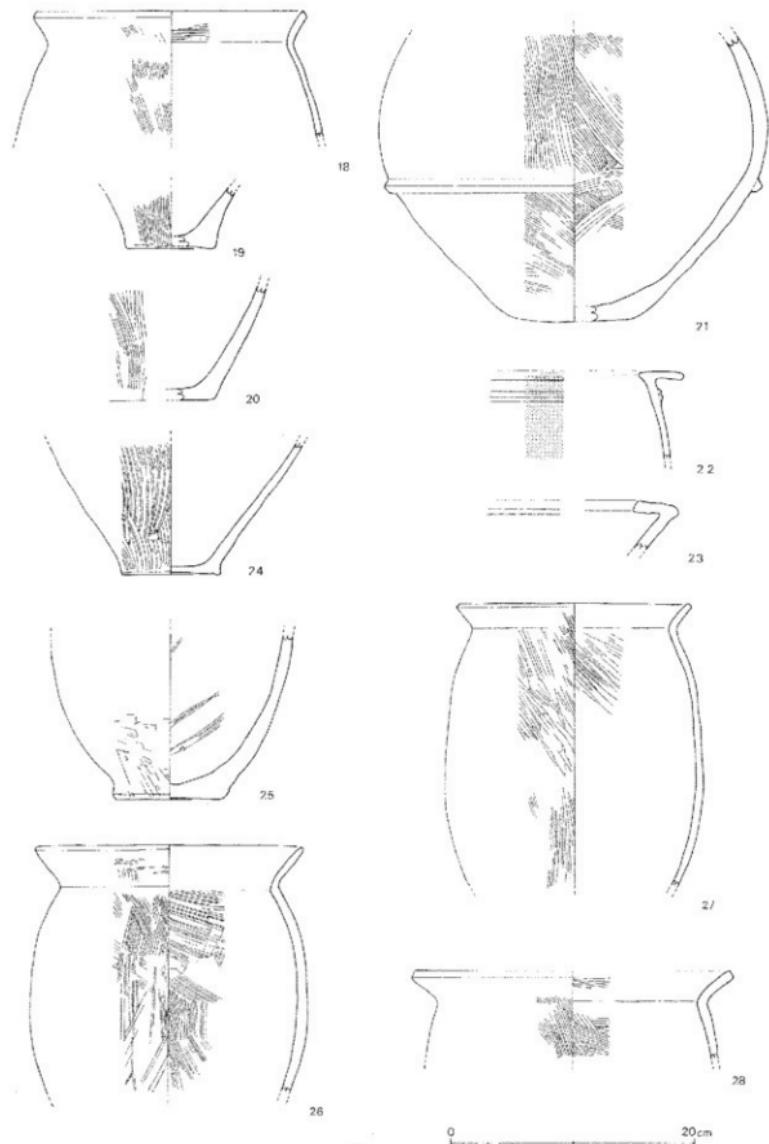
6は、朝鮮半島系無文土器小形壺である。底部を欠くものの平底か。色調は外は燃褐色(10YR3/1)、内はにぶい黄橙色(10YR7/3)。微細砂粒を少量含む。

1号溝出土の遺物

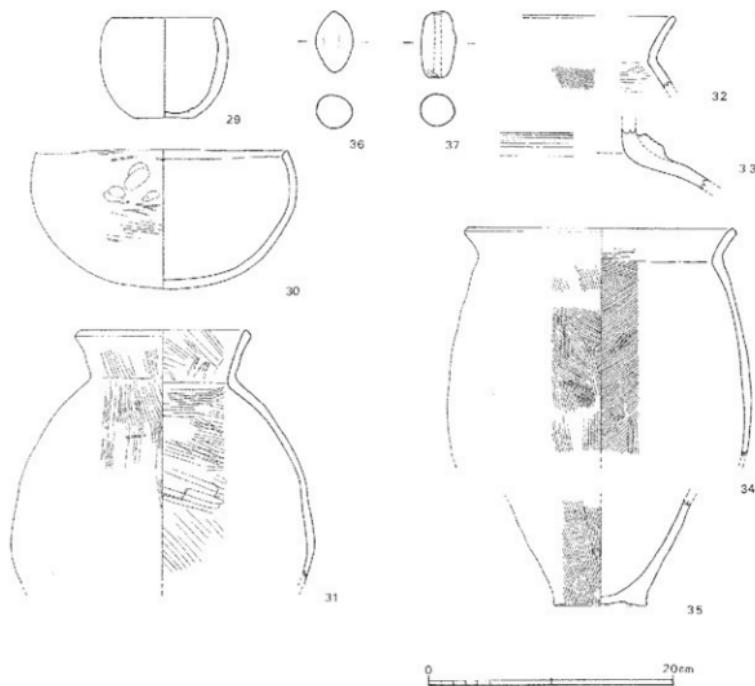
7は、わずかに外傾する鋤形口縁の丹塗壺で、微細な長石・石英粒を少量含む。須久II式期のものである。8と9は、くの字形口縁のもので、8は外が灰黄褐色(10YR5/2)で、8、9とともに長石と多量の石英が含まれている。10、11は丹塗壺で、ともに微細な長石・石英・雲母等を少量含み、胎土精良なところから接合はしないものの同一個体と推測される。先が細い鋤先口縁で内側に崩れ張り出しが認められる。肩部が丸みをもつことから須久I～須久II式にかけてのものと考えられる。11の内面はヘラナデ。12はくの字口縁の丹塗壺で、肩部が丸みをもっている。後期初頭のものか。13は、丹塗の頸部壺の蓋で表面にのみ丹をかける。微細な長石・石英粒を微量含む。小孔が2個づつ対になって4個認められる。14は丹塗広口壺で、13と同じく2個ずつ対になって4個の小孔がある。13の口径144mm、14の口径140mmで、セットになるものかもしれない。15は、朝鮮半島系無文土器壺である。口縁はゆるく外反し、器形は長胴で中位に肩部最大径(215mm)がくる。LI瓶部内面に指板がある。胴下部と肩部に内傾する結上の輪積痕があり、断面が分厚くなっている。この輪積部分から剥離しており、剥離していない部分も浅い谷状のつぎめが認められる。全体的に輪なつくりである。口径129mm、底部径92mm、最大高337mm。色調は外はにぶい橙(7.5YR7/3)、内はにぶい橙(7.5YR7/4)。石英粒を多く含む。時期的には片岡宏一氏によれば、無文土器後期後半の郡谷里遺跡段階、北九州の編年では弥生時代中期後半にあたるのではないかとの御教示をうけた。16は器台で口縁は強く外反し、裾部はラッパ状に開く。後期後半のものか。17は、瓦質土器の肩部である。18はくの字口縁の壺で色調は灰黄褐色(2.5Y6/2)で、長石・石英粒が含まれている。19、20は底部でやや厚手のものと薄いものがある。21は壺の胴部から底部にかけてのもの。色調は灰黄褐色(10YR5/2)。長石・石英・金雲母を含



第10図 出土遺物①土器・陶磁器 1/4 (6.15は朝鮮半島系無文土器)



第11図 出土遺物②土器 1/4 (25は朝鮮半島系無文土器)

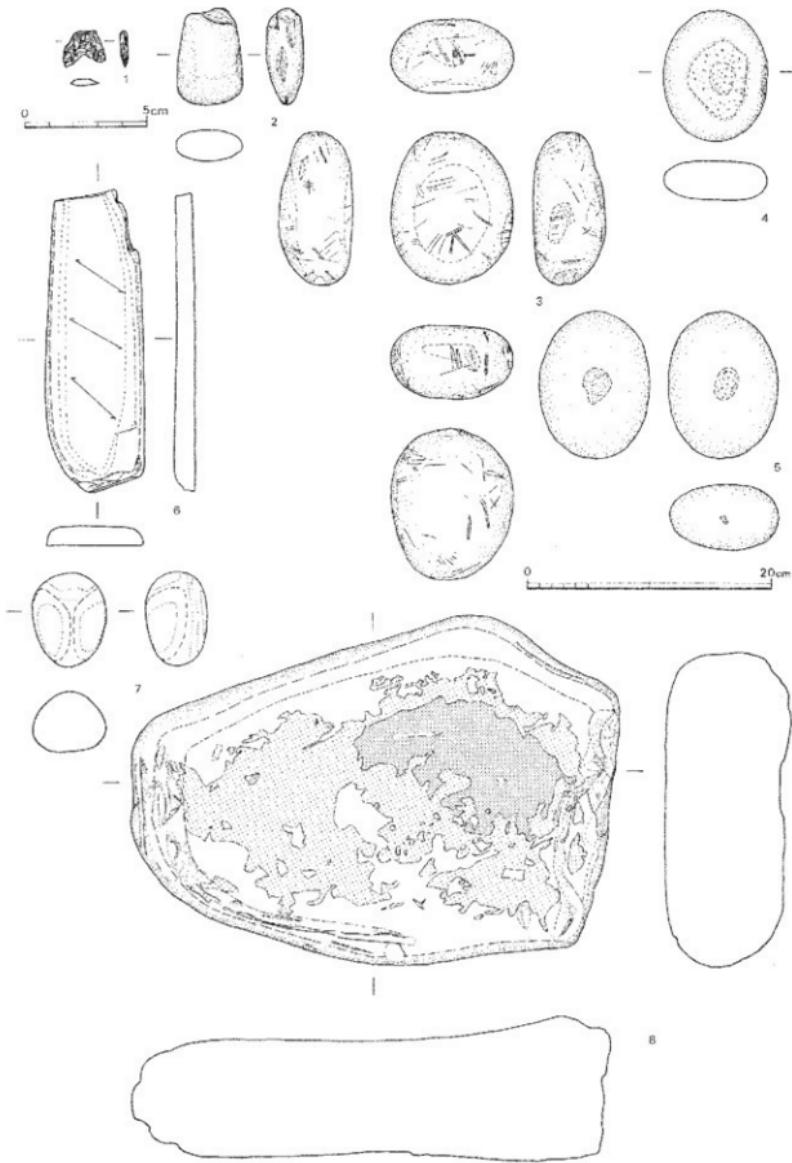


第12図 出土遺物③土器他 1 / 4

む。弥生時代後期のものだろう。

2号溝出土の遺物

22は丹塗窯の口縁部で、口縁端部に刻みに似た凹点がのこっている。胎上に長石・石英を含む。須久式のもの。23は袋状口縁壺の口縁部である。24は薄手の底部で底から粘土を詰めた痕跡がある。須久式土器の底部であろう。25は朝鮮半島系無文土器である。胴下半部から底部で内面に幅の狭いハケ目がある。外面にもササラ状の調整痕も認められる。底部径95mm。色調は外が明褐色(5YR7/2)、内がにぶい黄橙色(10YR7/2)。長石・石英粒を含む。26~28は、くの字状口縁の壺である。弥生時代後期のものであろう。29,30は鉢で、小形と中型のものが出土している。29は丹塗。30は、外面肩部に指頭痕あり、外はハケ目、内はナデ仕上。色調は外にぶい黄褐色(10YR7/2)、内はにぶい黄褐色(10YR6/4)。31はくの字口縁の壺。内外面ともに丁寧なハケ目調整を施す。長石・石英を含む。色調は外は灰色(5YR8/2)、内はにぶい褐色(7.5YR6/3)。古墳時代前期の所産であろう。32もくの字状口縁の壺。33は肩と頸の屈曲部に粘土帯を張りつけ横位に条線を施したもの。35は須久式壺の底部



第13図 出土遺物④石器 1/4

と考えられる。36は投擲で35.4g。37は土鍤である。39.5g。ともに21区3層からの出土である。

3号溝出土の遺物

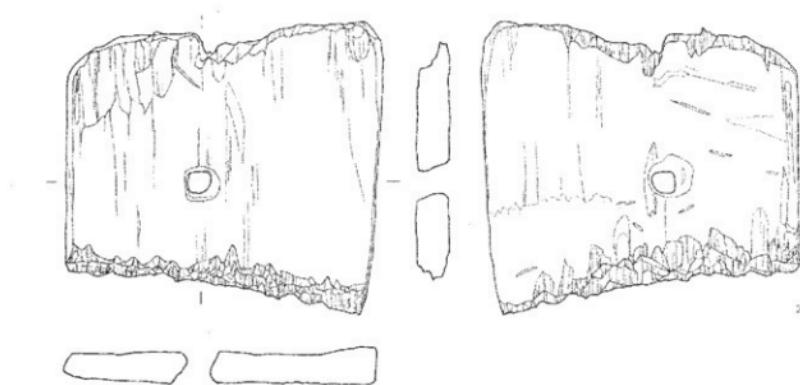
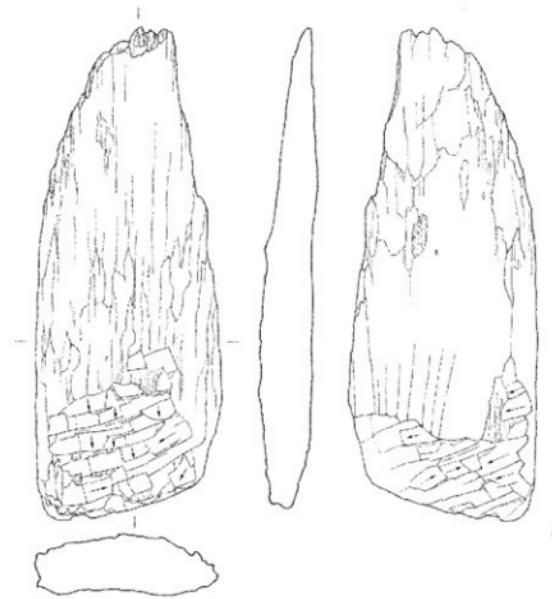
34は、くの字状口縁の壺である。

②石 器

1は、黒曜石製の石鎚である。先端部欠。21~22区にかけての3層からの出土。2は磨製石斧。やや短いがこれで完形で、長年刃部を研ぎだしたために短くなつたか、折れたものを再加工したものだろうか。1号溝からの出土。長さ73mm、幅54mm、厚さ30.5mm、重さ199.6g。3~5、7はすり石である。3は縁辺部3個所に敲打痕がついている。察痕も認められる。縦123.5mm、横100.5mm、厚さ60.5mm、重さ1,141gである。4は、正面と側面に敲打痕がある。縦106mm、横84mm、厚さ32.5mm、重さ481.2g。5は、正面と裏面、底面に敷打痕がある。縦119mm、横89.5mm、厚さ54.5g。7は、比較的小型のすり石である。図上の下端部にわずかな敲打痕が残る。縦76mm、横60.5mm、厚さ51mm、重さ342.9g。6は砾石である。斜めに研ぎ痕が残る。裏面は平らな剥離面である。上端部欠。縦246mm、幅81.5mm、厚さ17.5mm、重さ637g。8は、台石である。長軸長400mm、短軸長286mm、厚さ118mm、重さ19.9kg。正面の台石面に黒色(10YR2/1)(スクリントーンの濃いほう)と黄褐色(2.5Y5/3)の付着物が残っている。

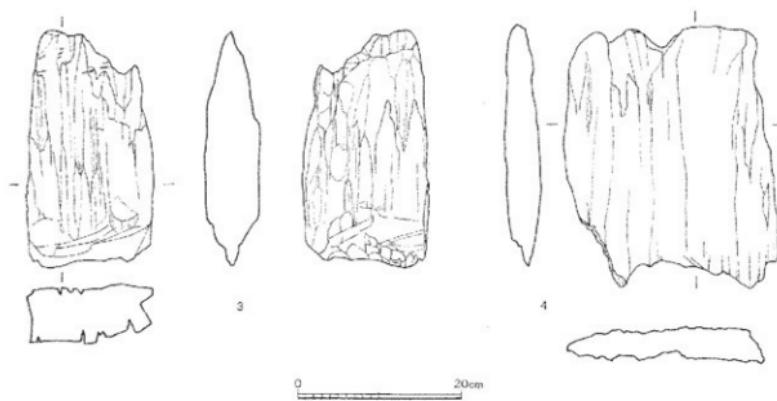
③木製品(矢板)

4点とも、25区水田跡の畦畔の矢板である。1は取上げNo W-10で長さ605mm、幅227mm、厚さ60mmで、図上で下端にあたる打ち込み側を表裏両面から先端部をカットして尖らしている。カット面には、幅30mmの刃部痕がついており、幅からして手斧に設置した片刃磨製石斧の刃部痕かとも推察される。2は取上げNo W-8で、縦357mm、横389mm、厚さ47mmで、上端の肩が丸い略長方形をしている。中央やや左下よりに略隅丸方形の穿孔がある。2も表裏両面からカットして尖らしている。3は、同じく25区西側断面に半分埋まっていた個体で、W-5の取上げNoを附した。縦284mm、横149mm、厚さ67mmで、同じく表裏両面からカットして尖らせている。4は、取上げNo W-1で、縦323mm、横250mm厚さ42mmである。裏面のみカットして尖らせている。



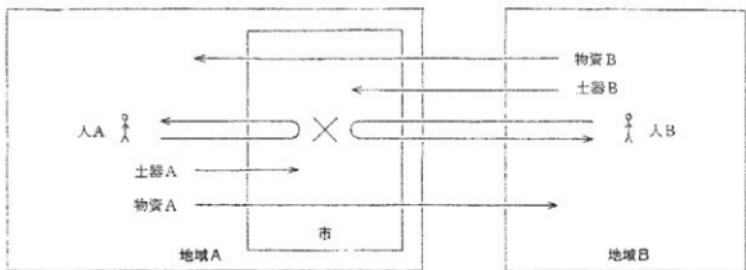
第14図 出土遺物⑤木製品（矢板）1/6

0 20cm



第15図 出土遺物⑥木製品（矢板）1/6

3. まとめ



第16図 訪問交易と土器の動き（白井2001「勘島貿易と原の辻貿易」から）

平成10~12年度の3年に亘る農道の調査で、祭儀遺跡等がある丘陵部の西側低地部を、ほぼ南北に貫く形で原の辻跡の様相をみてきた。幅は5.3m程、総延長は522mになる。

平成8年度には、船着場跡の発見があったし、並行して特定調査・国庫補助・緊急雇用対策関係の調査等もあり、徐々にではあるが西側低地部の様相が判ってきてている。しかし、調査が進むほど複雑な様相を示し、一筋縄ではいかない遺跡でもある。

平成5年度からの丘陵部東側の調査及び範囲確認調査等で丘陵部をまわる三重の環濠集落跡であることがわかってきた。しかし、丘陵部の西側となると東からの続きの環濠が部分的にはめぐるもののか、旧河川があつたり、環濠が途中で切れたり、環濠と環濠の間を直行するような環濠がでできたり複雑な様相を示している。

今年度の農道の調査でも、22区から23区にかけて弥生時代中期から後期に機能したと思われる1~3号溝を確認した。この3条の溝は、その時代もほぼ同じで、向きも同じ向きを示していることから添になる可能性がある。2号溝には底部に杭列があり、防護意識の強さも推察される。平成8年度の隣接し、直交する農道の調査で、濠と溝が確認されており、今回確認した1~3号溝に接続する可能性がある。

また、25区~26区にかけて矢板列を両側に打ち込んだ畦畔が確認され(註1), その北と南の両側に2枚の水田が推定されるが、現時点の調査中にも湧水があり丘陵から沖積地の低地への地形変換点に位置することが、その造営条件に合致しているのかもしれない。水田の北側には矢板は確認されなかつたが、南側の右田町分の調査区でも矢板列を確認した。

その水田の南側に5号溝、北側水田の覆土を切って上位に4号溝、この水田を切って北北西から南南東の向きに6号溝がある。調査区北端には、0号溝を検出したが、これは前年度調査の旧河川の南岸



第17図 これまでの調査成果による造構配置図

になる可能性もある。

3年の調査を概観してみると、北から南へ、1区(5.3m×20m)から27区までのうち、1~6区は、生活区域である。4棟の掘立柱建物跡、生活に伴う土塙等がある。これらの掘立柱建物跡には、柱穴内に平石の石製基礎があり、その類例は北九州ではなく熊本の嶺南地方の勘島遺跡に知られている(西谷2001)。これらの建物は高床倉庫である可能性がある。また、17区にも5棟目の高床倉庫である可能性のある掘立柱建物跡がある。水田跡は、14区~15区にかけてと、今回の25~26区にかけての場所で、わずかに確認された。「魏志倭人伝」にいうところの、「田を耕すといえども、猶食するに足らず」の記述を思い出させるようである。また続けて「…南北に市羅す」と、交易に従事した一支団の人々のことを描写しているが、白井克也氏は、原の辻貿易のモデルを提示した(註2)。原の辻遺跡の場合は、船着場跡の南側及びその周辺が、その「市」の候補地ということになろう。

「市」には、その交易品の保管のための倉庫が必要であるから、高床倉庫も現在確認されている数より、もっと必要になるだろう。交易品には日常の生活のための食料である米や、貴重品である青銅製品・鉄製品等々があり、その保管のため、あるいはその防衛のための複雑な濠等が必要になり、この西側低地のような複雑な濠のつくりとなったものであろうか。中国の都市では船着場と「市」が付随しているという。現在の部分的な調査段階では、環濠と船着場は離れており、有機的には連絡していないが、本来は一体のものとして機能していたのではないかとも推測される。平成10年度の調査で北端に近い2区で確認した濠と、今年度調査の1~3号溝の、ともに船着場に向かっている方向が、その根拠ではある(註3)。

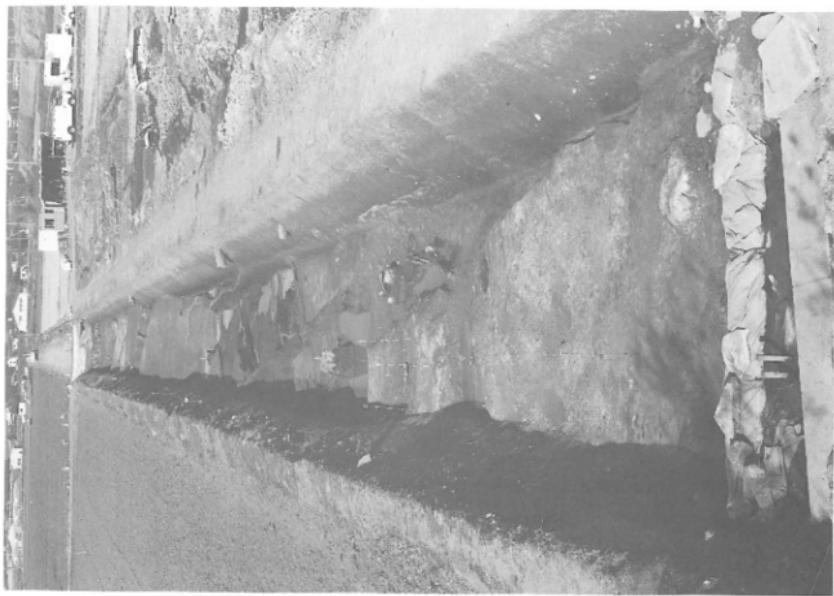
註1 矢板を14C年代測定に出したところ、補正値で2440年(±70年)の年代が出た。縄文晩期から弥生時代前期始め頃の値になるわけだが、原の辻遺跡では前期末からの土器しか出ていない。無文土器も現在のところそこまで古いものは無いようである。

註2 白井克也 2001「勘島貿易と原の辻貿易」—粘土管土器・三轍土器・楽浪土器からみた弥生時代の交易—「弥生時代の交易」第49回埋蔵文化財研究集会発表要旨集。実際に原の辻遺跡では、地元でつくられた土器が現時点未確認で、そのほとんどは、伊都国(現福岡県前原市付近)産の土器と朝鮮半島系土器で占められており、原の辻遺跡を舞台に訪問交易が行われた場合の物資はそれぞれの交易先に移動し、土器はその市の場所に残るという白井氏のモデルにあてはまるようである。

註3 第17回でもわかるように途中で止まったり、それに直交するものとかもあり、複雑であり、その真偽はこの後の船着場跡南側を調査後の総合的な判断にまつしかない。

図 版

図版1



調査区全景（南から）



調査区全景（北から）

図版 2



調査風景
(手前は 1号溝)



調査風景
(手前は 2号溝)



調査風景
(石田町調査区)
5号溝と矢板列



1号, 2号, 3号溝検出状況（手前が1号溝）



2号溝遺物出土状況



2号溝検出状況。杭列が確認された。



水田・畦畔検出状況

図版 4



0号溝 検出状況（調査北端から）



1号溝 検出状況（東から）



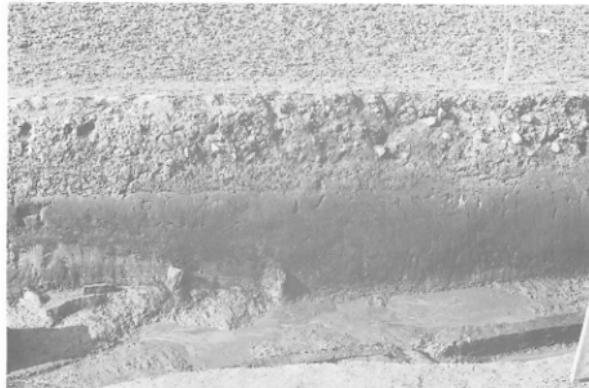
2号溝 検出状況（東から）



3号溝 検出状況（東から）



中世の杭列検出状況
(21区)



25区 西疊土層と矢板
出土状況



24区 水田 検出状況

図版 6



1号溝・2号溝 検出状況（手前が2号溝）



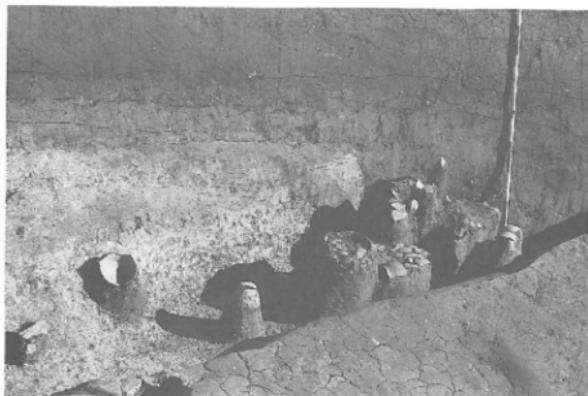
1号溝 遺物出土状況



水田・畦畔検出状況（南から）



4号溝 検出状況



2号溝 遺物出土状況
(23区)



2号溝内 桧列検出状況
(23区)



6号溝と畦畔跡、矢板
列検出状況 (25区)

図版 8



矢板出土状況



矢板出土状況



矢板出土状況
(石田町調査区)

報告書抄録

ふりがな	はるのつじいせき							
書名	原の辻遺跡							
副書名	轟鉢川流域総合整備計画（開場整備事業）に伴う緊急発掘調査報告書							
卷次	X							
シリーズ名	原の辻遺跡調査事務所調査報告書							
シリーズ番号	第23集							
編著者名	村川逸朗・藤村誠							
編集機関	長崎県教育庁原の辻遺跡調査事務所							
所在地	⑧811-5322 長崎県壱岐郡芦辺町深江鶴亀触1092番地1 TEL09204(5)4080							
発行年月日	西暦2001年3月31日							
ふりがな 所取遺跡名	ふりがな 所在地	コード 市町村 遺跡番号	北緯 °'\"/>	東經 °'\"/>	調査期間	調査面積 m ²	調査原因	
原の辻遺跡	長崎県壱岐郡 石田町池田仲触	42424	72°92'	33°45'30"	129°45'55"	2000.10.10 ~ 2000.12.26	518m ²	農業開発 開場整備
取扱遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項			
原の辻遺跡	遺物包含地	弥生時代 古墳時代	濠溝 水田 畦畔	弥生土器 朝鮮半島系土器 石器 矢板	水田跡2枚と畦畔遺構の検出			

原の辻遺跡調査事務所調査報告書第23集

原の辻遺跡

2001. 3. 31

発行 長崎県教育委員会
長崎市江戸町2番13号

印刷 株式会社 昭和堂印刷